

科目：国語

●問題冊子 5 ページ： ㊦ 下段 9 行目

(誤) イメジられていました。

(正) イジメられていました。

●問題冊子 14 ページ： ㊦ 問一

———— b「ゆる」

当該箇所の設問につきましては、解答の有無・内容にかかわらず、受験生全員に得点を与えることといたします。

以上

国 語

(問 題)

2025年度

〈R07162064〉

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、問題冊子および解答用紙には手をふれないでください。
2. 問題は3～16ページに書かれています。本文は二段になっています。試験中に問題冊子の印刷が見にくい、ページがぬけている、解答用紙のよれなどに気づいた場合は、手をあげて監督員に知らせてください。
3. 解答はすべて指定された場所に、HBあるいはBの黒の鉛筆またはシャープペンシルでいねいに記入してください。
4. 解答用紙記入上の注意
 - (1) 解答用紙の指定された場所（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に、いねいに記入してください。
 - (2) 指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。
 - (3) 解答用紙は折り線のところで折ってから解答してください。
 - (4) 解答の際は、「、」や「。」も一字と数えます。
5. 解答はすべて指定された解答らんに入してください。指定された解答らん以外に何かを記入した解答用紙は、採点しない場合があります。
6. 問題冊子の余白などは利用してかまいませんが、どのページも切り離さないでください。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにしてください。
8. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出してください。
9. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ってください。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

限られた資源を奪い合う人間同士は、しかし、ほとんど等しい力を持っています。したがってその奪い合いは、明確な勝ち負けのつくことのない、終わりのない戦いへと発展していきます。しかもその戦いは、「私」と同じ資源を求める者との戦いであり、したがってすべての人間に対する戦いの様相を呈するのです。※ ホッブズは、この状態を「万人の万人に対する闘争」と呼びました。

そんなことはオーバーだ、と思われるでしょうか。いえいえ、たぶんそんなことはありません。たとえば次のような状況を想像してみてください。

あなたは船で旅をしています。その船には一〇〇人の乗客が乗っていました。ある時、その船は高波にさらわれて難破し、あなたたち乗客は近くの無人島へと漂着しました。その無人島の中央には、小さな池があり、それが唯一の飲み水です。さてこのあと、この無人島では何が起ころうでしょうか。

ホッブズの想定に従うなら、戦いが始まります。誰かが「この水はおれのものだ！」と叫んだ瞬間に、戦いの **A** が切って落とされるわけです。最初に独り占めしようとした人は、他の人によって殺されるかもしれません。しかし、その他の人だって、決して安心できません。なんといってもそこには、あなたを含めて一〇〇人の人間がいるからであり、そして誰もがその水を求めているから

です。

この島に居続けることが、いかに危険であるかは、想像に難くありません。そしてその危険は、単に飲み物を確保できないかもしれない、ということではなく、他の漂流者によって殺されるかもしれない、ということに由来するのです。もしかしたら、漂流者のなかには、自分以外のすべての人間を殺せば、自分が飲み水を独占できる、とよからぬ考えを抱く人が現れるかもしれません。そうなれば、あなたは飲み水を心配するだけでなく、他の漂流者に対する身の安全についても心配しなければなりません。

他の漂流者に対して、身の安全を確保するために、最善の手段は何でしょうか。おそらくそれは、先手を打って相手を攻撃することです。たとえば、自分以外のすべての漂流者を殺してしまえば、もともと確実に自分の安全を確保することができます。論理的に考えれば、それが最善の答えです。ところが、問題は、すべての人が同じようにそう考える、ということです。 **B**、あなただけではなく、その島のすべての漂流者が、先手を打って他の漂流者を攻撃しよう、と考えるようになるのです。

ホッブズは、万人の万人に対する闘争は、ひとたび始まってしまふと、猜疑心によって全面的な戦争へと発展する、と考えました。つまりその状況では、すべての人が、問題が発生するよりも前に、

先手を打って互いを殺そうとするのです。

あなたは、もはや、飲み物を心配して他の漂流者と争うわけでは
ありません。他の漂流者から殺されないために、殺し合いに巻き込
まれてしまうのです。その先に待っている全面的な戦争が、どんな
悲惨な結末に至るのか、想像するのも恐ろしいです。

このように、すべての人が自己中だと、人々は争い合い、事態は
殺し合いへと発展してしまいます。しかし、その結果として自分の
身に危害が及ぶなら、C も子もありません。自己中は生物
の本能です。だとしたらそれは生存を目的にしたものだったはずで
す。それなのに、その自己中によってかえって生存が危ぶまれるこ
とになるなら、おかしい話です。

この問題はどのように解決されるべきなのでしょう。みんなが
殺し合って全滅する以外に、いったいどんな対処法があるでしょう
か。

これに対してホップズは次のようなアイディアを考えました。す
なわち、すべての人が従うべき絶対の権力を打ち立て、その権力に
対して完全に服従し、その代わりに自分の生命を守ってもらう、と
いうことです。

たとえば先ほどの無人島の例で考えてみましょう。飲み水をめぐ
って争い合っていた人々の間に、ある日、突如次のように提案する
人が現れます。「もうこんな不毛な争いはやめよう。みんなでルー
ルを決めて、そのルールに従って順番に水を飲んで良いことにしよ

う。もしもそのルールを破る人がいたら、全員でその人を罰するこ
とにしよう。お互いを憎しみ合うことはやめて、全員で生き残れる
ように、協力しよう」。

島でのバトルロワイヤルに疲れたあなたは、きっとこの提案に賛
同するでしょう。どう考えてもそれが合理的です。しかし、それは
自己中を部分的に放棄することを意味します。この提案に従ってし
まったら、もう自分が飲みたいときに水を飲むことはできなくなる
からです。それでもあなたにとって、この提案は魅力的に見えるは
ずです。なぜなら、ルールに従ってさえいけば、自分の生命の安全
を確保してもらうことができるからです。

ホップズによれば、人類の歴史において出現してきた権力は、す
べて、^②こうしたプロセスのなかで自然に発生してきました。たとえ
ば、村の首長や、国家の王の権力も、同じようなかていを経て生ま
れてきたのです。

権力は、決して神から与えられたものではなく、人々が合理的に
生き残ろうとした結果、必然的に出現してきたものである——彼は
そうした権力のあり方を「リヴァイアサン」と表現します。リヴァ
イアサンとは、『旧約聖書』に登場する海の怪物ですが、それは、
たくさん互いに協力する人々による、束ねられた力を表していま
す。

前述の通り、人間は対等な力を持つからこそ、殺し合ってしまう
のです。そうであるとしたら、圧倒的な力を持った存在が出現すれ

ば、ゲームバランスが崩壊し、戦争状態はストップすることになります。そうした圧倒的な力こそがリヴァイアサンとしての権力なのです。

こうした議論によって、ホッブズはなぜ人間が自らエゴイズムを制限し、ルールを守り、他者と協力できるようになるのかを説明しました。

D、ここで注意が必要です。権力に服従した人間は、決して、エゴイズムそのものを放棄したわけではありません。むしろ、エゴイズムに駆られていからこそ、権力に服従しているのです。なぜなら、服従する理由は、何よりもまず自分の生命を確保することにあるからです。人間がルールを守って他者に協力するのは、そうすることが自分にとってもっとも利益があるからでしかありません。

こうしたホッブズの議論は、「社会契約論」と呼ばれ、人間がいかにして社会を形成したのかを説明する理論として、歴史的に極めて大きな影響を与えました。もっとも、彼の考えにはいろいろと問題があり、その後の思想家たちによって様々な修正が施されます。しかし、人間の本質をエゴイズムのうちに見定める現実主義的な視点を保ちつつ、そこからどのようにして倫理が立ち現れてくるのかを説明できる点で、非常に優れた考え方です。

ホッブズの思想の長所の一つは、自己中がそれ自体で悪ではない、と考えることができる点です。もし、自己中そのものを悪だと見なしてしまったら、生物の本能は自己中なのだから、生きること自体

が悪である、という極端な思想へと陥りかねません。

自己中そのものを悪とすることが、私たちにとってどんな意味をもつか——それを問うた作品として、宮沢賢治の『よだかの星』があります。主人公である鳥のよだかは、毎日虫を食べて生きています。モデルとなっている現実の鳥類としてのヨタカは、口を開けたまま空を飛び、口の中に飛び込んだ虫をそのまま食べる、という習性があるそうです。この作品のなかのよだかも同じようにして生活しています。

よだかは鷹からイメージされていました。ある日、鷹は、よだかが自分と似た名前であることに腹を立て、「市蔵」という名前をよだかに押し付けようとします。そして、改名しないなら殺すと脅迫します。鷹はまったくの自己中です。しかし、鷹と戦っても、よだかに勝ち目はありません。

その日もよだかは虫を食べていました。彼は自分が虫を食べていることに対して無自かくでした。それは、日々の営みのなかで当たり前のように繰り返されることであり、特に意識する必要のない些細なことでした。しかし、突如として、自分の口のなかで殺される虫の存在を意識するようになってしまいます。そしてその瞬間に、非常に強烈な絶望感に襲われてしまうのです。彼は次のように言います。

ああ、かぶとむしや、たくさん羽虫が、毎晩僕に殺される。そ

してそのただ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなに
つらいのだ。ああ、つらい、つらい。僕はもう虫を食べないで餓
えて死のう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだろう。いや、その
前に、僕は遠くの遠くの空の向こうに行ってしまうおう。

こうしてよだかは、自分の住処を離れ、太陽へと昇っていき、も
えてしまいます。

ここには、宮沢賢治に特有の、仏教的な世界観が現れていると言
われます。よだかが絶望したのは、自分が虫を殺していることへの
罪悪感でもなければ、自分が鷹に殺されることへの恐怖でもありま
せん。むしろ彼は、どんな生物もエゴイズムを本能としており、他
者に対して暴力を振るうのであり、そして自分もその輪の中に組み
込まれ、そこから逃れられないことに絶望したのです。だからこそ
よだかは、生物であることをやめることで、この暴力の連鎖から脱
出することを試みました。もっともそれは、この作品のなかでは、
自殺を指すわけではありません。よだかが何を試みたのか。それは、
実際に作品を読んでみてください。

とはいえ、自己中をそれ自体で悪だと見なしてしまうと、それは
生存すること自体を悪とする発想へと、どうしても行きつきます。
なぜなら生物は、自分以外の生物に暴力を振るわない限りは、生き
残ることができないからです。私たちは、見かけの上では他者と協

力しているように見えても、実際には、自分の目の前にいない人を
搾取※^{さくしゅ}していますし、あるいは人間以外の動物を殺して食べています。
そこには明らかな自己中の暴力が発露※^{はつろ}しているはずです。もしも自
己中がそれ自体で悪なら、そんなことをすべてやめなければなりま
せん。しかし、それは生きるのをやめることに等しいのです。

実際には、こうした思想こそが正しい、と見なす立場もありえま
す。しかし、善悪の観念が社会契約によって生まれてきた、と考
えるホッブズの思想に従うなら、そうした結論はやはり極端だとい
ことになるでしょう。⑥ 私たちは、自己中だからこそ、他者に協力す
ることができるのであって、自己中そのものは善でも悪でもないの
です。

(戸谷洋志『悪いことはなぜ楽しいのか』より・一部改)

※ホッブズ……近世イギリスの思想家・哲学者。

※猜疑心……相手をうたがったり、ねたんだりする気持ち。

※自己中……「自己中心性」「自己中心的」を短くした言い方。

※バトルロワイヤル……最後の一人になるまで続ける戦いの形式。

※旧約聖書……ユダヤ教およびキリスト教の正典。

※エゴイズム……自己中心主義。

※搾取……何も与えずに相手から何かを奪うこと。

問一 — a「かてい」・ — b「かく」・ — c「も」・ — d「試」のひらがなは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問二 — A — C — に入る語を、それぞれ漢字一字で答えなさい。

問三 — B — D — に入る語をそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ ただし ウ しかし エ たとえば オ つまり カ あるいは

問四 — ①「それは自己中を部分的に放棄することを意味します」とありますが、その説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 水を平和的に共有するルールが、飲みたい分量や時間を各々に自制させるということ。

イ 水を誰のものでもないとするルールが、飲み水の総量を劇的に減少させるということ。

ウ 水を勝手に飲むと罰せられるというルールが、人間固有の本能を抑え込むということ。

エ 水を公正に分配するためのルールが、全員が無事に助かるために不可欠だということ。

問五 — ②「こうしたプロセス」とありますが、その説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア すぐれた思想家によって権力自体の意味合いが変化していき、人々がそれを受け入れるようになる。

イ 権力者が人々の争うさまを見て、それを止めるために作り出したルールに人々が従うようになる。

ウ 生存を求めて全員が殺し合うことに疲れ、権力に従って生命の安全をはかることを望むようになる。

エ 争いは不毛だと気づいた人がそれを多くの人に伝えた結果として、人々が平和を求めるようになる。

問六 — ③「倫理」とありますが、これと同じ意味で用いられている語句を、本文中から五字で抜き出して答えなさい。

問七 — ④ 「宮沢賢治」の作品を二つ選び、記号で答えなさい。

ア 吾輩は猫である わがはいねこ イ 高瀬舟 たかせぶね ウ 風の又三郎 またさぶろう エ 杜子春 とししゅん オ たけくらべ カ 銀河鉄道の夜

問八 — ⑤ 「非常に強烈な絶望感に襲われてしまう」とありますが、なぜですか。その理由として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 日々食べている虫たちと比べると、自分は自己中心的でしかないと思ったから。
イ 鷹のように力強い生物であっても、自己中心的であることにうんざりしたから。
ウ いじめられるのを嫌がることさえも、自己中心的な考え方であると思ったから。
エ あらゆる生物が、自己中心的な存在としてしか生きていけないと気づいたから。

問九 — ⑥ 「私たちは、自己中だからこそ、他者に協力することができるとありますが、なぜですか。四十一字以上五十字以内で説明しなさい。

問十 問題文を三つに分け、次の1から4の中から三つを用いて見出しの組み合わせをつくるとします。最も適切な組み合わせを選び、記号で答えなさい。

- | | |
|----------------|------------------|
| 1 万人の万人に対する闘争 | 2 自己中がそれ自体で悪ではない |
| 3 身の安全を確保するために | 4 リヴァイアサンとしての権力 |

ア	1	↓	2	↓	3
イ	1	↓	4	↓	2
ウ	3	↓	2	↓	1
エ	3	↓	1	↓	4

次の文章は、昭和三十（一九五五）年に発表された小説である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

わたくしがその子に心をひかれたのは三年前の秋でした。もしかしたら春だったかもしれません。そうですね。春です。うちの文吉ぶんきちと同じ幼稚園ようちえんに入ったその日です。しかしその日としては大して心に残るほどのこともなく、ただ、ほかの子供たちがみな、母親につれられてきている中で、その子だけが父親につきそわれていたことぐらいだったと思います。それも、あとになって、ああ、あの子、と感づいたぐらいのことでした。うちの文吉とて、その子と特別に親しかったというわけではなく、時たま、ほんの一月ひとつきに一度ほど気まぐれにその子を家へ誘さそってくるぐらいのことでした。

「おともだち、きたよ」

文吉のはしゃいだ声を聞くと、一応私は出ていって応対せねばなりません。

「あ、いらっしやい。——あら、おうちへいかずにきたの」

小さなバスケットは幼稚園からまっすぐうちへきたことを語っていました。入園の日、家庭への注意として園長先生は、

「バスケットをもっているときは、家へ帰っていない証拠しやうこですから、ぜったいにそのまま遊ばしておいたり、何かを与あたえたりしないで、一たんおうちへかえして下さい。五分でも帰りがおそくなれば、お互たがいに心配しなければなりませんから」

そんなこまかいところまで注意をうけねばならないのかと、その

時は思ったのですが、なるほど幼稚園に通い出すと、子供は急に社交的になり、A、誰だれかを誘たれってき、文吉もまた誘たれわれて寄り道をし、よく心配をかけました。

「さ、早くおうちへ帰って、そのバスケットをおいて、おかあさんにそういつてから遊びにいらっしやいね」

「……………」

バスケットをもったまま不服そうにだまってつつ立っています。

「あなたのおうち、どこ？」

「あっち」

「そう。じゃあ早くお帰んなさい。おかあさん心配してるわ」

すると文吉がからだをふって、

「いやだ、いやだ、キクオちゃんと遊ぶんだい」

「じゃあ文吉、一しよにおくっててあげなさい」

それでなっとくして、二人は出てゆきました。ところが今度は文吉がなかなか帰ってこないのです。姉娘あねむすめをみにやると娘はひとりでもどってきて、

「キクオちゃんて、おかあさんいないみたいよ。そんな気がしたわ」

「そうかね」

「文吉をつかまえて、はなさないのよ。帰っちゃいやだって」

「ほかに、だれもないの」

「若い、女中[※]さんがいたわ」

それっきりわたくしはその子のことを忘れていました。その後も何度かうちへきたようでしたが、バスケットをもったままではなかったので、特別交渉^{こつしやう}がなかったわけです。

そして、その年の秋、文吉にせがまれて、わたくしは町の小学校の運動会をみに出かけました。隣の奥^{となり}さん^{おく}も一しよでした。近道をとってお宮の森をぬけていると、むこうからキクオちゃんが出てきます。ひとりぼっちです。

「あ、あの子、だれだっけな、文吉」

名前さえも忘れていたわたくしを文吉は笑って、

「キクオちゃんだよ、忘れんぼだなー、おかあちゃんは」

「あ、そうだそうだ——キクオちゃん、運動会、いけないの」

近づいてきたキクオちゃんに声をかけると、キクオちゃんは思いがけない返事をしました。

「もうみてきたんだもん、男女同権だもん」

「え？」

「男女同権だもん」

まじめくさった顔でさっさといてしまいました。わたくしは文

吉の手前

B

、お隣の奥さんと顔を見合わせました。

「なんのことでしょう」

「おもしろいわね」

「何かのかんちがいね、あのまじめさは」

「男女同権で運動会をみにゆく——おかしいわね。女の方はだれのことでしょう」

「別に、そんな深い意味はないんでしょう」

「おかあさん、なくなったんですってね」

「あ、やっぱりそうですか」

隣の奥さんに聞いて、はじめてはっきりしたのですが、そう聞くと、キクオちゃんの様子には、思いあたることがいろいろありました。いつか文吉がいったことがあります。

——おかあちゃん、キクオちゃんたら、すぐ、おべんとうのおかず、ちようだいっていうんだよ——

——おやおや——

——いやしんぼだね——

——おかしいね——

——キクオちゃん、いつでも、つくだにのおかずだよ——

——そう、キクオちゃんつくだに、すきなんだろうよ——

——ううん、きらいなんだって。それなのにおねえちゃんが、つくだにばかりいれてくれるんだって——

そのおねえちゃんが中学三年だということもだれからか聞き、父子三人と女中さんの四人ぐらしの味気なさは、キクオちゃんを通してわたくしの胸にいつもなにかをうったえてくるのでした。もちろん意識的にうったえられるわけではありません。わたくしが勝手に臆^{おそ}

測して、じぶんひとりで感じていただけのことです。

「文吉、お前の誕生日に、キクオちゃん呼んだげようか」

わたくしの提案に文吉はとび上がって喜びました。しかしわたくしは、先方のおもわくも考えて、その前日になると、そっと娘を使いに出了しました。

——あした、文吉の誕生日ですので、キクオちゃんをお茶にお呼びしたいのですが、よろしゅうございましょうか——

ちようどキクオちゃんのおとうさんがいて大変よろこんでくれ、——いつもキクオがおせわになりました、なにしろ、母のない子供でして、目にあまることもありましようが、どうぞよろしく——

こんなわけで、その日だけは幼稚園の帰りにまっすぐ立ちよることを承認しあったのですが、キクオちゃんがくる前に、お祝いが届き、わたくしはすっかり恐縮してしまいました。赤いカーネーションの花束に、おさるのおもちゃです。——文吉は猿年^①なのでした。

それを机の上にかざってやりながら、わたくしは、花束を届けてくるキクオちゃんの家の雰囲気^{ふんいき}を、あれこれと思いえがいていました。届けてきたのは女中さんだけれど、それをきめたのはキクオちゃんのおとうさんだろうか、おねえさんだろうか。娘のみたところによると、キクオちゃんの家は、くらしはゆたからしいのに、いかにも主婦のいない家と一目でわかるような、ほこりのつんだ感じだというのです。

「ただいまア」

「ただいまア」

幼稚園の道から走りつづけたそのいきおいで二人はかけこんできました。文吉がバスケットを玄関に投げ出すと、キクオちゃんも同じようにたたきつけました。それが二人の喜びの表現であったのでしよう。文吉という子も、実を申しますと戦争のために両親を失った孤児^{こじ}で、わたくしの本当の子供ではありません。生後まもなく縁あってわたくしの家へ引きとり、わたくしを母とよばせてはいますが、孫であつてもちようどよいほどの年のひらきです。若い、ぴちぴちした両親から生まれながら、年老いたわたくしたちを親と思ひ、疑っていない彼^{かれ}をみますと、今後、ぜったいに肉親の弟妹^{ていまい}をもつことの出来ぬ文吉に対して、わたくしの胸の消えかけた母性の火は、油をそそがれるのです。

かわいそうな文吉、戦争の残した孤児……

しかしその哀れさ^{あわれ}を文吉に感じさせてはならないと思い、一人っ子のわがままをゆるすまいとし、そのことで逆に失敗もしたりしています。厚着^{あま}をさせて風邪^{かぜ}をひかせたり、甘い親になつて幼稚園をさばることを許したり、要するにばあ育ちの弱虫を作りあげまいとの氣づかいのあまり、こせこせとしてしまうのです。いつのまにか一人っ子の、末っ子の、総領[※]のもつわがままさを独占^{どくせん}させているのです。②そういう点で、文吉とキクオちゃんには、どこなく共通

したところもあるようでした。しかし、キクオちゃんにはどこか、文吉よりも大人っぽく、虚無^{きよむ}的なところも感じられました。ひいき

目かもしれませんが、文吉の方がずっと子供らしく、甘えん坊^{ぼう}なのです。

（中略）

「そういえば、このごろキクオちゃんがちっともこなくなつたわね」

あるとき、ふつと気づいてそういいいますと、

「新しいおかあさんがきたそうよ」

と、どこかで聞いてきたらしく、娘は答えました。

「そうかい。そりゃあよかったね。きつといいおかあさんなんだよ」

「どうして」

「子供がついてはなれないんだらうからさ。上べだけじゃあ子供はなつかないよ」

（中略）

くれも押し^おせまつたある日、わたくしは阿佐ヶ谷^{あさがや}ゆきのバス^cのてい車場に立っていました。人足の賑^{にぎわ}っている大通りの向こうの町角から、黄色い揃^{そろ}いの風呂しき包みをもった母子が現れ、こちらへ近づいてきます。——あつ、キクオちゃんだ！

わたくしははじめて見かけるその新しいキクオちゃんのおかあさん^④を、ひそかな親しさをこめてむかえていました。紺^{こん}のスーツを着た三十二、三とみえるおかあさんに、やはり紺の小学生服を着たキクオちゃん。二人はともに揃^{そろ}いの黄色い風呂しき包みをもって歩

いてくる。どこからみてもそれは自然な母と子の姿でありました。まったくキクオちゃんのきれいになったこと。色まで白くなり、坊^{ぼう}ちゃんガリの前髪^{まえがみ}の毛先がつやつやとして帽子^{ぼうし}の下からはみ出ています。わたくしをみて、にこにこしているキクオちゃんに、わたくしは気軽に話しかけました。

「おかあさんとお出かけ？ いいことね」

そのわたくしの親しさに対して、キクオちゃんのおかあさんは微笑^びをたたえながら、目でキクオちゃんに聞いています。

——どなた？

と。

わたくしもまっています。

——文ちゃんのおかあさんだよ。

と紹介^{しょうかい}されるのを。

しかしキクオちゃんは、なぜかにはかんでおかあさんのうしろにかくれようとしました。

「あのう、キクオちゃんのおかあさんでいらっしゃいますか。わたくし、文吉の母でございます」

するとキクオちゃんのおかあさんは急に親しみをみせ、

「あ、さようでございましたか。一度ごあいさつに出ようと存じながら——」

「いいえ、わたくしの方こそ。——先日^⑤はまた、文吉がいろいろ

そのときバスがきて、わたくしたちはいそいでのりこみました。

「おかあさん、こっち」

キクオちゃんの声が奥の方から聞こえてきました。じぶんはさき
にのりこんで母のために両手で席をとる子供のことを、日頃^{ひごろ}のわたくしはあまりよい感じではみないのですが、その時のキクオちゃんばかりは、反感を感じませんでした。それは母のしつけのせき^dにんではなく彼は彼らしく、幼稚な母思いでそうしたにちがいないと思えたからです。

「いいから、キクオちゃん、そこにすわってらっしゃい」

彼女は黄色い風呂しき包みを抱^{かか}えたまま、わたくしのそばになら
んで立っていました。紺のスーツと黄色の風呂しきの色どりの美し
さに、あらためてわたくしは目を見はっていました。それが、母子
揃っているとき、一そう調和をみせていたことと思ひ合わせて、

——きつと、幸せなんだろうな……

とひとり、他人ごとながら喜びました。阿佐ヶ谷駅で私は彼女の
一人半分の新宿ゆきにつづいて東京ゆきを買いました。

——早く、早く、おかあさん！

ホームではキクオちゃんが入ってきている電車にのろうとせき立
てました。そして、母親の改札を見きわめてさきになってとびこみ
ました。とたんにドアがしまり、キクオちゃんだけのりこんでし
まったのです。その瞬間^{しゅんかん}の困惑^{こんわく}の顔！ 紺のスーツの人はドアに近
づいていて、

「しんじゆく」

と叫^{さけ}びました。

「しんじゆく？」

それに大きくうなずきながら、紺の学生服は、黄色い包みを胸に
抱^だいて、遠ざかってゆきます。それをおかあさんは、手をふって見
おくりしました。それはどうみても、昨日や今日の母子ではありませ
んでした。

——幸せなんだな……

わたくしはひそかにその母子に声援^{せいえん}をおくりながら、次の電車に
のりました。^⑤こんだ電車の中で、キクオちゃんのおかあさんとは
別々になってしまいました。が新宿が近づく^はと心おどらせながらホー
ムをのぞきました。ホームの端^はに黄色い包みを抱えた紺の小学生が、
顔を左にむけて、はいつてくる電車をまちうけている姿が、とびこ
んできました。

——ああ、よかった。

わたくしはほっとしながら、^⑥紺と黄のいろどりの美しさに、もう
一度驚嘆^{きょうたん}しました。

(つばいさかえ) 壺井栄「紺と黄のいろどり」より・一部改

※女中……やとわれて家事の手伝いなどをする女性。

※総領……家を継ぐ子。

※人足……人の往来。

問一 — a 「く」 ・ — b 「ゆる」 ・ — c 「てい」 ・ — d 「せきにん」 のひらがなを、漢字に直しなさい。

問二

A

B

に入る語句として最も適切なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- A ア 一日にあげず イ 二日にあげず ウ 三日にあげず エ 四日にあげず
B ア 笑いをこらして イ 笑いをとって ウ 一笑にふして エ 失笑を買って

問三

① 「猿年」とありますが、この前の年を表す動物名が□に入る語句を選び、記号で答えなさい。

- ア 九□の一毛 イ 立つ□あとをにごさず ウ □の耳に念仏
エ □の威を借るキツネ オ 迷える□

問四

この文章では、「——」がさまざまな用法で使われています。その説明として適切なでないものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「わたくし」がその場にいなかった会話について用いられている。
イ 多くの人の声と声とが重なったことを示すために用いられている。
ウ 実際に発声されなかった心中の言葉を表すために用いられている。
エ 発言を途中で切ったときの様子を表現するために用いられている。

問五

② 「そういう点で、文吉とキクオちゃんには、どこことなく共通したところもあるようでした」とありますが、どのような点が共通しているのですか。その説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

- ア 生みの母がいないうことで家族に気をつかれ、自由にふるまえるようになっていた点。
イ どちらも一人っ子であるため親の愛情を一身に受け、まわりが見えなくなっている点。
ウ 家族を戦争で失いながらも幸福な家庭で育つことにより、自信に満ちあふれている点。
エ 周りの人が気をつけていることを感じ、それに応えようと無理に明るくしている点。

問六 — ③ 「文吉よりも大人っぽく、虚無的などころも感じられました」とありますが、それはなぜだと考えられますか。その理由として

最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア キクオは普段から一人でいることが多いので、年上の人に対して緊張しやすくなったから。

イ キクオは年の離れた姉や父とくらしているの、自然に大人の態度を身に着けていたから。

ウ キクオは父親から愛されないことにいらだち、いつも不平不満をかかえて生きているから。

エ キクオは母親がいなかったために甘え方がわからず、無理にでも自立しなければならぬから。

問七 — ④ 「ひそかな親しさ」とありますが、この時の「わたくし」の心情の説明として最も適切なものを選び、記号で答えなさい。

ア 文吉の世話をしてくれたことに対する感謝の気持ちはあるが、文吉の心が自分から離れる気がして、キクオの新しい母へのねたましさを心に秘めている。

イ キクオと文吉の交友の深まりが楽しみになっており、自分もキクオの新しい母と仲よくしたいと考えているが、どのように声をかけようかと迷っている。

ウ 前から気にかけていたキクオを、自分と同じく血のつながらない子として育てる新しい母に共感しているが、一方的な気持ちなので表に出さないでいる。

エ キクオの新しい母と親しくなりたい気持ちはあるが、自分と血が繋がっていないことを文吉が意識し、関係が悪化することをさけないとも考えている。

問八 — ⑤ 「こんだ電車の中で、キクオちゃんのおかあさんとは別々になってしまいました」が新宿が近づくとき心おどらせながらホームをのぞきました」とありますが、なぜ「心おどらせ」しているのですか。その理由を四十六字以上六十字以内で説明しなさい。

問九 ― ⑥「紺と黄のいろどりの美しさ」とありますが、これはどのようなことを表していますか。次のように説明するとして、

と ☐ Y にあてはまる語句を本文中から八字と二字で、それぞれ抜き出して答えなさい。

☐ X

キクオと新しい母が

☐ X

ではなく、本当の親子のように ☐ Y して見えるということ。

問十 この文章の表現についての説明として適切なものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 色と色の組み合わせをいくつか用いることにより、登場人物の個性の違いを際立たせている。
イ せりふの中にあえてわかりにくさを残すことで、子どもらしさを表現しているところがある。
ウ 過去の出来事を起こった順に書かないことで、読み手が結末を予想できないようにしている。
エ あえて表情についての説明をせずに、会話から登場人物について想像させるようにしている。
オ 「わたくし」が経験した過去のことを、読み手に直接語りかけるような調子で書かれている。

〔以下 余白〕

国語解答用紙

< R 07162064>

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。

問
十

問
九

問
八

X

Y

60

45

折
り
線

The diagram shows a floor plan of a building with the following components:

- Central Hall (問九):** A large rectangular area divided into a grid of smaller squares. It is labeled "問九" (Mon Kyū) at the top.
- Left Wing:** A long vertical corridor on the left side, containing several rooms labeled "問一" (Mon Ichū), "問二" (Mon Nī), "問三" (Mon San), "問四" (Mon Shi), "問五" (Mon Go), "問六" (Mon Roku), "問七" (Mon Shichi), and "問八" (Mon Hachi).
- Right Wing:** A long vertical corridor on the right side, containing several rooms labeled "問一" (Mon Ichū), "問二" (Mon Nī), "問三" (Mon San), "問四" (Mon Shi), "問五" (Mon Go), "問六" (Mon Roku), "問七" (Mon Shichi), and "問八" (Mon Hachi).
- Entrance:** Located at the top center, labeled "問一" (Mon Ichū).
- Other Rooms:** Several smaller rooms are scattered throughout the plan, including "問一" (Mon Ichū), "問二" (Mon Nī), "問三" (Mon San), "問四" (Mon Shi), "問五" (Mon Go), "問六" (Mon Roku), "問七" (Mon Shichi), and "問八" (Mon Hachi).
- Dimensions:** The diagram includes numerical labels for dimensions: "50" and "40" are visible near the central hall.

〈R 07162064〉

受験番号	万	千	百	十	一
氏名					

(注意) 指定された場所以外に受験番号・氏名を書いた解答用紙は採点しない場合があります。

→

採点欄
国語

問十	問九	問八

			二								一	
問六・七	問四・五	問二・三	問一	問十		問九		問七・八	問六	問四・五	問二・三	問一